平城京左京一条二坊十五坪の調査

―第598次

1　はじめに

本調査区は、左京一条二坊十五坪の南西で、坪の西の境界付近に位置し（図250）、十坪との間の東二坊坊間東小路の東側溝の想定位置にあたる。約10m南の平城第123-34次調査では、標高70.20m付近で、東に12度振れる幅0.8m、深さ0.3mの南北溝を検出している。調査面積は25.25㎡（東西４m、南北５m、西及び南に合計5.25㎡拡張）である。調査期間は、2018年５月15日～2018年５月16日である。

2　基本層序

地表から、１層：黒色粘質土（攪乱層、約30㎝）、２層：褐灰色粘質土（耕作土、約30㎝）、３層：褐灰色粘質土（耕作土、約25㎝）、４層：黄橙色粘質土（遺物包含層、約10㎝）、５層：褐灰色粗砂（南北溝１埋土、約20㎝）、６層：灰白色粗砂（小穴１埋土、20㎝）、７層：黄褐色粘質土（地山、約10㎝）、８層：黄白色粘質土（地山、15㎝以上）である。遺構検出は地山である７層上面で行った。標高は、70.69～70.80mであり、北から南に向かって傾斜している。遺構検出面の地表からの深さは0.4～0.5mである。

3　検出遺構

南北溝SD11296　調査区西部で検出した奈良時代の南北溝。幅1.3～1.4m深さ0.2mであり長さ5.2m分を検出した（図252）。真北から東へ約６度振れている。南端はSE11299に壊され、北端は古代以降の斜交する深い大型の溝に壊されている。埋土はしまりの強い灰白色粗砂で、埋土中からは、長さ１㎝以上の大粒の炭化物片とともに、奈良時代の須恵器、土師器が多数出土した。SD11296の底面で、SP11297とSP11298を検出したが、SD11296より西では、古代の遺構は検出しなかった。

小穴SP11297　SD11296の底面で検出した楕円形の小穴。長径0.65m、短径0.5mで、深さ0.19mである。SD11296と重複しそれより古い。奈良時代の須恵器が出土した。

小穴SP11298　SD11296の底面で検出した円形の小穴。直径0.5m以上で、深さ0.12m以上である。SD11296と重複しそれより古い。奈良時代の土師器が出土した。

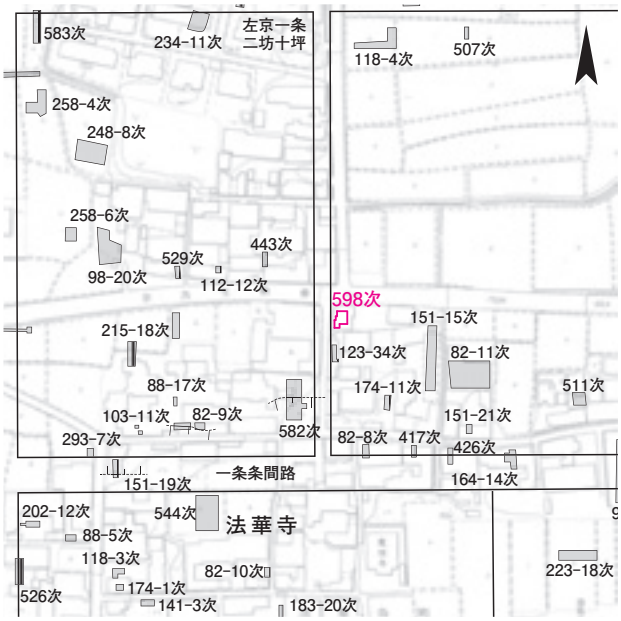

図250　第598次調査区位置図　１：3000

図251　第598次調査区全景（北から）

井戸SE11299　調査区南部で検出した近世以降の円形の井戸。南端と西端は調査区外に延びる。直径1.7m以上の円形の掘形をもち、その内側に直径1.3m以上の井戸側が据えられている。井戸側は大部分が抜かれており遺存状態が悪いが、南端で背面に綾杉状の刻み目が施された瓦形の井戸専用の磚が据えられていたため、磚組の井戸と考えられる。井戸側にはこの瓦形の磚が平瓦に置換された箇所も認められた。

調査区外の地表には、井戸側の同心円周上の位置に平瓦の破片が露出しており、井戸側の一部と考えられる。井戸内の埋土は、約0.4mの掘削にとどめて、底面まで掘削しなかった。

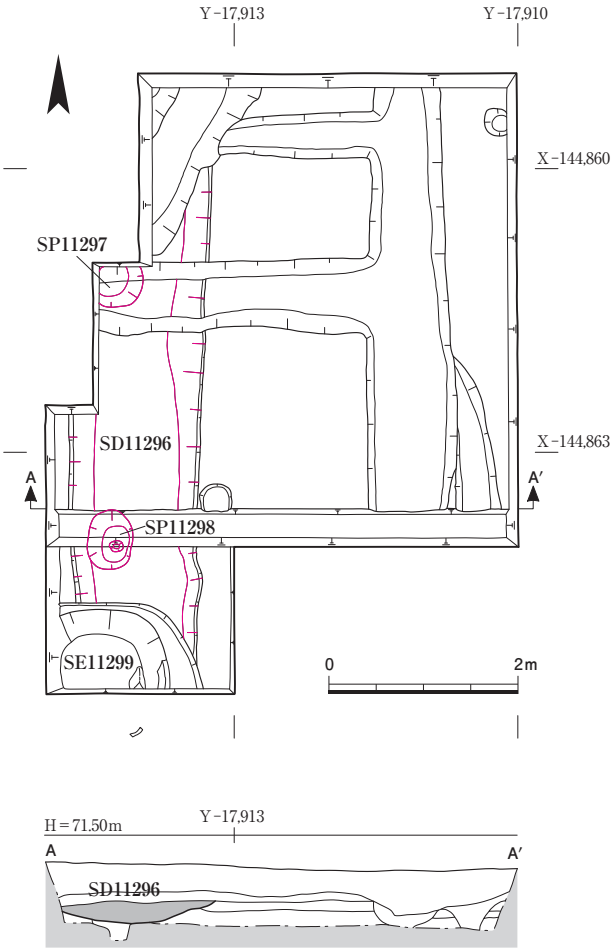

図252　第594次調査遺構図・土層図　1：100（トーンが南北溝1）

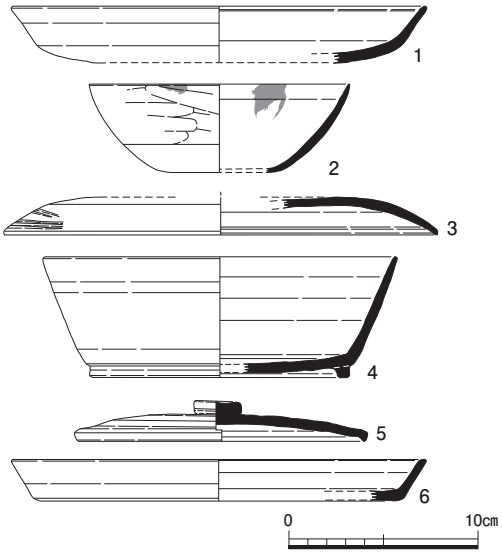

図253　第594次調査出土土器　1：4

4　出土遺物

瓦磚類　古代に帰属する瓦磚類としては、軒丸瓦（6282Ba）が１点、軒平瓦（6689A）が１点、磚が１点、平瓦が整理用コンテナ３箱分出土した。　**（国武貞克）**

土器・土製品　整理用コンテナ２箱分の土器が出土した。SD11296からの出土土器が大半を占める。奈良時代後半の土器が主体で、土師器は杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、皿Ｃ、椀Ａ、椀Ｃ、高杯Ａ、甕Ｂ、須恵器は杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、鉢Ｂ、盤、壺Ｎからなる。

図253-１～３は土師器。１は皿Ａ。口縁部は斜め上方に向かってわずかに外反し、口縁端部の肥厚はやや太い。c0手法か。２は椀Ａ。口縁端部内面の一部には煤が付着し、灯火器としての利用が推測される。c0手法。３は皿Ｂ蓋。外面にヘラミガキの痕跡あり。４～６は須恵器。４は杯Ｂ。やや低い高台は、やや外側に踏ん張り、端部は平坦面をなす。５は杯Ｂ蓋。頂部外面はヘラケズリ後に部分的にナデが施される。６は皿Ｃ。口縁端部はやや内傾する平坦面をなす。　**（山藤正敏）**

石製品　SD11296の北端を壊す調査区北西部の斜交溝の埋土中から砥石が１点出土した。板状の結晶片岩の片面に、幅約５㎜程度の筋状の溝が平行して少なくとも５本観察される。玉砥石の可能性がある。

5　まとめ

調査区西端で検出したSD11296は、その位置から東二坊坊間東小路の東側溝の可能性が高い。平城第123-34次で検出した南北溝とは、東西の位置関係から別の溝と考えられる。また、SD11296の底面で検出したSP11297とSP11298は、南北に並び、約３ｍ（10尺）離れているため、一連の塀の柱穴を構成する可能性がある。ともに、十五坪の西の区画に関係する施設であった可能性が高い。SD11296は、東二坊坊間東小路の側溝の可能性が高い遺構として初めての事例となるため、今後周辺の調査により検証していく必要がある。

SE11299は井戸側が大部分抜かれており遺存状態が良くないが、近世以降の磚組の井戸である。同じく法華寺町の平城第575次調査で検出したSE11125と同様の構造と推定され、貴重な類例が追加されたといえる。**（国武）**